様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３２５１００２

研究課題名（和文）世界の博物館アメリカ―移民と基層文化の再検討によるグローバル地誌の構築―

研究課題名（英文）America as the world's museum: Global regional geography by reexamining immigration and base culture

研究代表者
矢ケ崎　典隆（YAGASAKI, Noritaka）

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：３０１６６４７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　26,600,000円

研究成果の概要（和文）：多民族社会として知られるアメリカ合衆国では、移民集団はいつの時代にも異なる文化を持ち込み、それが蓄積されて基層（古いものが残存するアメリカ）を形成してきた。従来のアメリカ地誌は表層（新しいものを生み出すアメリカ）に注目した。しかし、1970年代以降、アメリカ社会が変化するにつれて、移民の文化を再認識し、保存し、再生し、発信する活動が各地で活発化している。多様な文化の残存、移民博物館、移民文化の観光資源化に焦点を当てることにより、現代のアメリカ地誌をグローバルな枠組みにおいて読み解き直すことができる。アメリカ合衆国はまさに「世界の博物館」である。

研究成果の概要（英文）：Immigrant groups have brought cultures from their native places the world over to the United States in the history of its development. Those cultures came to constitute America’s base culture, which consists of old cultural elements. Regional geography of the United States used to focus on the surface layer, i.e. newly formed American ways of living and production. In recent years, however, immigrant groups attempt to reevaluate, restore, recreate, and publicize their own cultures as American society became more tolerant to the ethnic diversity. A new approach to the regional geography of the United States is proposed by paying attention to the cultural relics, immigrant museums, and commodification of immigrant cultures. The United States needs to be viewed as the world’s museum.

研究分野：地理学

キーワード：地理学　グローバル地誌　移民　人口移動　博物館　アメリカ合衆国　多民族社会　基層文化

１．研究開始当初の背景

学術研究の世界および一般社会において地理学に課せられた重要な役割の一つは、世界の諸地域を正確に理解するための方法と素材を提供することである。日本にとってアメリカ合衆国は政治的にも経済的にも重要な国であるが、日本におけるアメリカ合衆国への学術的関心は、政治、経済、歴史、文学等に著しく偏っている。一方、地理学研究者はアメリカ合衆国に関して多様な研究を蓄積してきたが、それらは個人的な学術的関心や経験に基づいて行われてきた。私たちはアメリカ合衆国に関する地域認識を深めるための本質的な議論を開始する時期を迎えている。そのために、アメリカ地誌の方法を提示すること、そして体系的に事例研究を蓄積することが急務である。そこで本共同研究では、アメリカ合衆国を「世界の博物館」として認識することを提唱する研究代表者（矢ケ崎 2011)、そして世界各地で地理学的研究に携わってきた 7 名の研究分担者がこの課題に取り組むことになった。

２．研究の目的

アメリカ合衆国がアメリカ先住民の世界にヨーロッパ文化圏が拡大した結果として形成され、世界中からの移民を受け入れることにより発展を続けてきたことは一般の理解の通りである。本研究では、アメリカ合衆国に関する地域認識を深めるために、グローバルな枠組みにおいてアメリカ合衆国を地誌学的に再検討するための方法を構築することを目的とする。そのために、表層（新しいものを生み出すアメリカ）と基層（古いものが残存するアメリカ）に着目し、移民が持ち込んだ多様な文化要素の残存、移民博物館、移民文化の無形博物館、移民文化の観光資源化に焦点を当てる。そして、事例研究を蓄積することにより、仮説「アメリカは世界の博物館である」を検証する。こうした作業により、世界の文化が記録・記憶されるという博物館アメリカの地域像が明らかになる。

３．研究の方法

世界各地から導入された文化要素の残存を調べるために移民博物館に着目し、全国規模における移民博物館の類型と分布を調査した。また、アメリカ合衆国に移住した多様な移民集団（アイルランド系、フランス系、ドイツ系、北欧（デンマーク）系、バスク系、ポルトガル系、中国系、日系、ラテンアメリカ系）を対象として、現地調査を実施した。移民集団の移住プロセスを明らかにするとともに、アメリカ国内における移民集住地域を選定し、移民博物館、郡や州の歴史協会・博物館、移民団体等での資料収集を行った。そして、多様な文化要素の残存、無形博物館、観光資源化を検討した。また、移民の出身地において、アメリカ合衆国との文化的な結びつきや文化要素の変容について資料収集を行った。こうした結果に基づいて、仮説「世界の博物館アメリカ」を検証し、グローバル地誌研究のあり方を検討した。

４．研究成果

アメリカ合衆国は多民族社会であるが、1970 年代以降、多民族の存在に対するアメリカ社会の寛容度が増すと、移民集団による適応戦略が変化した。そして、移民の文化を再認識し、保存し、再生し、観光資源化して発信する動きが活発化した。全国に設立された移民博物館を集計すると、171 か所が確認された。これらのいくつかを検討すると、移民博物館が 1970 年代以降のアメリカ社会の動向を反映することが明らかになった。移民博物館は、それぞれの移民集団の構成員が移民の歴史を記憶し、集団への帰属意識を確認できる場である。一方、ホスト社会の構成員は、移民博物館を訪問することにより、移民の多様な文化と経験を理解し、多民族社会アメリカの一員であることを再認識することができる。このような有形の移民博物館に加えて、フェスティバルやパレードなどの行事は無形の移民博物館として機能する。すなわち、世界の多様な文化がアメリカ合衆国に蓄積・記憶される。また、世界の様々な事件もこの国に記憶・記録される。すなわち、アメリカ合衆国はメタファーとしての博物館である。移民と移民博物館に焦点を当てることにより、グローバルな枠組みにおいてアメリカ地誌を再構築することができる。

移民集団に関する事例研究として下記の成果が得られた。

北欧系移民の入植とその後の米国内での地域的展開ならびに移民社会の形成過程についての先行研究を踏まえた上で、山根拓は、北欧系移民史やその文化を伝える北欧、特にデンマーク系の移民博物館に注目し、その活動内容と存在意義を考察した。

まず移民出身地のデンマークとスウェーデンにある移民関係博物館などを訪問し、北欧系移民史に関する基礎的事実・情報を取得した。次に、主要な北欧系移民博物館・文書館を訪れ、その展示や活動について調査し、資料収集などを行った。最終的にアイオワ州エルクホーンにある Museum of Danish America（以下 MDA と略記）に焦点を絞り、その展示内容、館の諸活動を中心に、観察・聞き取り・資料収集を行った。1994 年に開館した MDA の内部には、展示スペースのほか、定期的な集会などに用いる小ラウンジや売店等が設けられている。移民史を丹念に追った常設展示と館の定期刊行物“America Letter”を重点的にチェックし、同館の存在意義等に関する以下のような結論を得た。①北欧系移民博物館は全米に分布するが、かつて移民の多かった中西部にやや集中する傾向がある。②MDA は中西部開拓集落に立地し、移民史・文化などを伝え共有するため、常設・特別展示のほか講演会・演奏会・民族祭

等を実施してきた。③同館は併設の系譜学センターとともに移民資料を保持し、デンマーク移民に係る外部の研究機関等とも連携して、移民史研究の中核となっている。④同館刊行物の誌面分析により、同館が地元を中心とする全米のデンマーク系移民によって支えられ、デンマーク系アメリカ文化の継承のみならず、民族的アイデンティティの構築や移民文化再生産に寄与していることが明らかとなった。

根田克彦はアイルランド移民（アイリッシュ・アメリカン）を担当して、ニューイングランドを研究対象地域とした。対象はカトリック系アイリッシュの祝祭である、セント・パトリックス・デイ・パレードである。セント・パトリックス・デイは、セント・パトリックの命日である 3 月 17 日に行われる行事であり、従来、日本ではその実態はほとんど紹介されていなかった。このような祝祭空間も重要なエスニック景観の一つであり、無形の移民博物館といえる。根田はニューヨークのカトリック系アイリッシュの組織を訪問し、セント・パトリックス・デイ・パレードを観察した。

アメリカでは 2015 年現在約 240 のセント・パトリックス・デイ・パレードが開催されている。文献と各パレードのウェブサイトの情報から、セント・パトリックス・デイ・パレードの歴史は次の 3 時期に区分できた。第 1 期はセント・パトリックス・デイ・パレードが初めて開催された 18 世紀初頭から 19 世紀初頭までである。この時期のセント・パトリックス・デイ・パレードは裕福なプロテスタント系アイリッシュ・アメリカンが、親睦のために開催した。第 2 期は 19 世紀中期から後半までであり、ジャガイモ飢饉以降に急増したカトリック系アイリッシュ・アメリカンが、ホスト社会であるプロテスタント系イギリス人社会に対し自らを守るためとアイデンティティの確認のためにコミュニティを単位として、パレードを開催した。第 3 期は 20 世紀の前半で、この時期にセント・パトリックス・デイ・パレードは本国の独立支援と独立後はアイルランド政府がアメリカ政府に対しアピールする場として利用された。さらに、20 世紀後半以降になると、アイルランド問題の鎮静化によりセント・パトリックス・デイ・パレードの政治利用の重要性は低下するが、商業化・観光化が顕著となった。現在では多くのパレードが 3 月 17 日ではなく、土日に開催されている。

フランス系を担当した大石太郎は、おもにメイン州とカナダのニューブランズウィック州において調査を実施した。アメリカ合衆国に居住するフランス系住民は、フランスからの移住者よりもむしろ、フランス系カナダからの移住者の子孫がほとんどである。本研究ではメイン州北部に居住するアカディアンをとりあげ、1978 年から開催されてきたアカディアン・フェスティバルに注目し、現地調査に基づいて彼らのアイデンティティを検討した。

18 世紀末よりセントジョン川上流域に居住するアカディアンは、1842 年にメイン州と現在のカナダ・ニューブランズウィック州との境界がウェブスター・アシュバートン条約によって米加国境として確定したことにより、二つの国家に分かれて帰属することになった。とはいえ、生態的基盤を同じくすることに変わりはなく、セントジョン川上流域のアカディアンは、たとえばプロイーとよばれるそば粉入りのクレープといった共通の食文化を維持してきた。ただ、1960 年代になると国境をはさんだつながりは徐々に薄れていき、メイン州では 1970 年代にカナダ側とは異なる時期にアカディアンの祝日が設定された。転機が訪れたのは 1990 年代に入ってからである。1994 年の第 1 回大会開催以来、世界に散らばるアカディアンが集まる機会となっている「世界アカディアン会議」の第 5 回大会が 2014 年にニューブランズウィック州北西部とメイン州北部、さらにはケベック州テミスクアータ地方による合同開催が決定されると、メイン州側で開催されてきたアカディアン・フェスティバルはカナダ側のアカディアン・フェスティバルで実施されてきたタンタマルを導入するなど、大きな変化をみせた。このように、本研究ではメイン州北部に居住するアカディアンのアイデンティティが、出身地であるカナダ側の動向とかかわりながら変容していることを明らかにした。

石井久生はバスク系移民を研究対象とした。バスク系移民は 19 世紀半ば以降アメリカ西部に入植したが、その出身地が国家単位ではなくスペインとフランスにまたがるバスク地方であるため、センサスや移民統計などの公的資料から移民の実態を知ることは困難である。しかし、彼らが牧羊業に参入し羊飼いの大多数がバスク系移民であったこと、羊飼いの活動拠点が西部諸都市に設置されたバスク・ホテルであったことに着目し、調査対象をバスク系羊飼いとバスク・ホテルに限定することで、バスク系移民の実態が明らかになってきた。

その中でも集中調査を実施したのがアイダホ州のボイジーの事例である。ボイジー近郊にバスク系移民が入植するようになったのは 20 世紀初頭であった。彼らはバスク・ホテルを活動拠点として、牧羊業などに就業した。ボイジーのバスク・ホテル集中地区は鉄道駅の北東側数ブロックの狭い範囲に形成され、そこには最盛期の 1920 年代から 1940 年代にかけて 10 以上のバスク・ホテルが立地した。1970 年代に入るとバスク地方の経済環境の改善により移民の流入は途絶え、ボイジーのバスク・ホテルもすべて閉業した。しかし、かつてバスク・ホテルが集中したグローヴ通り 600 番街ブロックは、1985 年にバスク博物館が開設され、それを契機に

バスク関連諸施設がそのブロックを占有するようになり、現在では「バスク・ブロック」と呼ばれるようになっている。ボイジーのバスク・ブロックは全米で唯一バスクのエスニック景観が観察される地区であるが、この場所に関わるバスク系移民を調べることで、彼らの故地であるバスク地方と入植地のアメリカ西部をひとつの連動したトランスナショナル社会空間として定義することが可能になってきた。1970 年代までのヒトの移動によりこの社会空間は構築・強化されてきた。しかしそれが途絶えた 1980 年代以降、故地バスク地方でのナショナリズムの高まりと連動するように、この空間に人的移動が形成したネットワークを介してバスク文化に関する情報が移動するようになる。トランスナショナル社会空間を介してのヒトと情報の連続的な移動がバスク・ブロックのエスニック景観を再生産していると結論付けることができるのである。

加賀美雅弘はアメリカ合衆国におけるドイツ系集団の伝統文化に関する研究を分担した。主にカリフォルニア州ロサンゼルス大都市圏におけるドイツ系集団特有の景観と彼らの組織に着目し、彼らが開催するドイツ的なイベントを対象にした調査を行い、そこに維持される伝統文化を踏まえつつ移民の「博物館」に関する考察を行った。

アメリカ国内におけるドイツ移民を祖先にもつ人々はきわめて多いが、積極的なアメリカ社会への統合を進めてきたために、彼らの伝統文化はさほど目立ってこなかった。ロサンゼルスでは、ドイツ系の人々はきわめて分散して居住し、彼らに関連する宗教や教育、商店等の特定地区への集中はみられない。その一方で、1970 年代以降、教会や商業施設、クラブなどの組織を単位にした文化活動が徐々に活発になっている。ドイツ語圏特有の飲食や雑貨の販売、合唱や演奏などのサークル活動、ビール祭りのようなイベントの企画・運営がなされ、ドイツ文化の魅力が強調されている。これら企画にはドイツの自治体や企業も参加しており、ドイツ的なイベントが増加傾向にあることが明らかになった。

さらにドイツ的なイベントとしてオクトーバーフェストに着目し、これに伴うエスニック文化の維持・継承に関する考察を行った。オクトーバーフェストはドイツ・ミュンヘンの伝統行事であり、これがアメリカ国内では、ビールをはじめとする料理、着用される伝統的な衣装や歌などにおいてオーセンシティ（真正性）を強調する祭りになっている。ここにおいて伝統文化が商品化されていること、フォークロリズムの視点から伝統文化が移民集団を象徴し、アピールすることにつながっていることが明らかになった。そしてその上で、近年、ドイツ系集団に関する有形の「博物館」が建設される一方で、ドイツ的なイベントが、伝統文化をアピールして文化の個性を具現化する「場」となっており、無形の「博物館」としての意味をもっている点について考察した。

なお、ドイツ系の中でもヴォルガジャーマンと呼ばれるロシア出身のドイツ人移民については矢ケ崎典隆が担当した。18 世紀後半にドイツからロシアのヴォルガ川流域に入植して独自の文化を維持したドイツ人は、1 世紀後に迫害が始まると、南北アメリカの草原地域に再移住した。アメリカ西部では甜菜栽培に従事し、甜菜糖産業の発展に貢献した。ヴォルガジャーマンは 1970 年代から、ロシア系ドイツ人アメリカ歴史協会（本部はネブラスカ州リンカーン）を組織して活動を活発化した。この団体は博物館と図書館を維持し、雑誌を刊行するとともに、カナダ西部を含めて北米に 45 支部を設け、毎年、全国大会を開催している。ドイツ系は一般にアメリカ社会に積極的に同化したが、ロシア系ドイツ人は独自の文化的活動を続けている点でユニークな存在である。

1970 年代からアジアやラテンアメリカからの移民が増加し、アメリカ合衆国のアジア化とラテンアメリカ化が進行している。山下清海は、アメリカ合衆国の華人に焦点を当てながら、「世界の博物館アメリカ」の中で、華人がいかなる役割を果たしてきたか、また、華人社会の変容と現状について考察した。現地調査は、サンフランシスコ、ニューヨーク、シカゴ、フィラデルフィア（ペンシルヴェニア州）、ヒューストン（テキサス州）、ポートランド（オレゴン州）のチャイナタウンを中心に実施した。

アメリカ合衆国の伝統的な華人社会は、広東人を中心とする老華僑によってダウンタウンのチャイナタウンが形成された。第二次世界大戦後、台湾や香港出身の移民が増加し、裕福な華人の郊外化が進み、新たに郊外型チャイナタウンが形成されるようになった。1978 年末以降、中国の改革開放が進行するにつれ、中国大陸出身の新華僑が急増した。新華僑の多くは、伝統的なチャイナタウンに流入するとともに、サンフランシスコ、ニューヨーク、ロサンゼルスなどでは、裕福な新華僑は郊外の居住条件がよい特定の住宅地に集中し、新しいチャイナタウンを形成した。また、1975 年のベトナム戦争終結後は、ベトナム・ラオス・カンボジア出身の華人系難民もチャイナタウンに流入するようになり、チャイナタウンの「リトルサイゴン」化も進展している。多様化、複雑化するアメリカ合衆国の華人社会の理解のために、老華僑の知識人を中心に、華人博物館の整備が、サンフランシスコ、ロサンゼルス、シカゴをはじめアメリカ各地でみられる。特にサンフランシスコのチャイナタウンの中にあるアメリカ華人歴史学会博物館は、アメリカ華人社会の中心的役割を果たしている。今日のアメリカ華人社会の課題として、新しくアメリカ合衆国に移住してきた中国大陸出身者と、アメリカ社会に同化してきた老華僑との間に、生活

様式、思考様式などの面で差異があることが指摘できる。アメリカの華人社会を多面的にとらえていくことが重要である。

ラテンアメリカ系移民を担当した浦部浩之は、アメリカ合衆国の中で特に「ヒスパニック/ラティーノ」人口の割合が高いニューヨーク州（ニューヨーク）、フロリダ州（マイアミ）、テキサス州（サンアントニオ、エルパソ）、ニューメキシコ州（アルバカーキ、サンタフェ）、カリフォルニア州（サンフランシスコ、サンディエゴ）を対象とし、ラテン系の博物館や団体施設、その他の移民博物館や地域博物館、Barrio（バリオ）と称されるラテン系住民集住地区を訪れ、各施設の概況や展示の方針、および景観観察などの調査を行った。

「ラティーノ」と「ヒスパニック」はほぼ同一の社会集団を指す語ではあるが、その意味合いがやや異なることに注意を要する。概括的に言えば、「ヒスパニック」はイスパニア（スペイン）との歴史的・文化的つながりを重視する白人層やエリート層に好んで用いられ、「ラティーノ」はラテンアメリカとの結びつきや混血性を重視する移民出身層に好んで用いられる。この社会集団には、独立期以降の古い移民の子孫、19 世紀の米墨戦争による領土変更の結果アメリカ人になったメキシコ系、新しい出稼ぎ労働者層などの多様性があり、またキューバ系、プエルトリコ系といった下位区分もある。その意味で、日系やドイツ系といった括り方とは必ずしも並列で論じられない。

この内なる多様性は、各博物館のスタンスにも微妙な違いとなって反映されている。たとえばニューヨーク市のヒスパニック・ソサエティ博物館はイベリア半島からの移民に重点があり、同市のバリオ博物館はラテンアメリカ系の新移民の芸術を強調する。アルバカーキの全米ヒスパニック・センターは、膨大な数のヒスパニック系住民の移民記録をデータベース化するなど、記憶や記録の集積と継承を目的の一つとしている。他方、エルパソには非ラテン系の視点でラテンアメリカ系住民を捉えているともいえる国境警備博物館がある。なお、出稼ぎ目的の新しい移民は、博物館といった文化施設を通じての連帯やアイデンティティの表明をほとんどできていないように見える。こうしてヒスパニック/ラティーノ系の博物館を俯瞰してみると、その多面性は、歴史的重みを感じさせるスペイン系の建造物や街並み、移民送金を担う金融商や出稼ぎ者支援の司法施設が連なる街路、ラテン系住民の内面を表象する壁画といった、都市の景観的な多面性に通じるものがあるといえる。

以上の研究成果を踏まえて、『世界の博物館アメリカ』の出版に向けて作業を始めている。従来のアメリカ地誌はこの国の表層（新しいものを生み出すアメリカ）に着目してきた。しかし、1970 年代以降のアメリカ社会の動向を観察すると、基層（古いものが残存するアメリカ）に着目することの意義は大きい。移民、移民文化、移民博物館に焦点を当てることにより、現代のアメリカ合衆国の地域像を提示することができる。

〈引用文献〉

① 矢ケ崎典隆編、アメリカ（世界地誌シリーズ 4）、朝倉書店、2011.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 矢ケ崎典隆：探検と発見のアメリカ地誌―地誌学の再構築に向けて―、地理学評論、招待論文（会長講演）、88(2)、2015、83-101.
② 加賀美雅弘：ロサンゼルスにおけるドイツ系住民の分布に関する一考察、東京学芸大学紀要人文社会科学系 II、査読無、66、2015、39-48.
③ 石井久生：トランスナショナル社会空間における結節点としてのバスク・ホテル―ベーカーズフィールドの事例―、共立国際研究、査読無、32、2015、43-70.
④ 矢ケ崎典隆：アメリカのエスニック地誌、新地理、査読無、62(2)、2014、24-31.
⑤ 根田克彦：ボストン市におけるインナーシティの活性化戦略―ロックベリー地区の事例―、奈良教育大学紀要（人文・社会科学）、査読無、63、2014、87-97.
⑥ 矢ケ崎典隆：アメリカ合衆国カンザス州南西部の甜菜糖産業とロシア系ドイツ人、歴史地理学、査読有、56(2)、2014、1-24.
⑦ 石井久生：バスク系羊飼いによるバスク地方とアメリカ合衆国西部間の移住行動―ナバラ州バスタンの羊飼いの事例―、共立国際研究、査読無、31、2014、37-61.
⑧ 山下清海：A comparative study of Chinatowns around the world: Focusing on the increase in new Chinese immigrants and forming new Chinatowns、人文地理、査読有、65(6)、2014、73-85.
⑨ 加賀美雅弘：ドイツ・フォークラント地方の地域再生にとっての野外博物館、東京学芸大学紀要人文社会科学系 II、査読無、65、2014、23-34.
⑩ 矢ケ崎典隆：理想郷としての南カリフォルニア―地域イメージと人口移動―、地理誌叢、査読無、55(1)、2013、1-10.

〔学会発表〕（計 18 件）

① 矢ケ崎典隆：世界の博物館アメリカ―移民と基層文化の再検討によるグローバル地誌の構築―、公益社団法人日本地理学会春季学術大会、2015 年 3 月 29 日、日本大学（東京都世田谷区）

② 加賀美雅弘：ロサンゼルスにおけるドイツ的伝統文化のリバイバル―「世界の博物館アメリカ」の展示物になりうるか？、公益社団法人日本地理学会春季学術大会、2015 年 3 月 29 日、日本大学（東京都世田谷区）
③ 根田克彦：アメリカ合衆国におけるアイリッシュの祝祭空間としてのセント・パトリックス・デイ・パレード、公益社団法人日本地理学会春季学術大会、2015 年 3 月 29 日、日本大学（東京都世田谷区）
④ 山根拓：デンマーク系アメリカ博物館の移民文化再生産活動、公益社団法人日本地理学会春季学術大会、2015 年 3 月 29 日、日本大学（東京都世田谷区）
⑤ 石井久生：アメリカ西部におけるバスク系移民のエスニック景観―アイダホ州ボイジーのバスク博物館とバスク・ブロック、公益社団法人日本地理学会春季学術大会、2015 年 3 月 29 日、日本大学（東京都世田谷区）
⑥ 大石太郎：アメリカ合衆国メイン州におけるアカディアン・フェスティバルとフランス系住民のアイデンティティ、公益社団法人日本地理学会春季学術大会、2015 年 3 月 29 日、日本大学（東京都世田谷区）
⑦ 矢ケ崎典隆：移民と多民族社会に着目したアメリカ地誌、平成 26 年度日本大学地理学会第 2 回例会、2014 年 10 月 18 日、日本大学（東京都世田谷区）
⑧ 山下清海：新華僑の増加とホスト社会―世界と日本の新旧のチャイナタウンの事例から―、公益社団法人日本地理学会秋季学術大会、2014 年 9 月 21 日、富山大学（富山県富山市）
⑨ 矢ケ崎典隆：The role of immigration museums in America and global regional geography、The 9th Korea-China-Japan Joint Conference on Geography、2014 年 7 月 7 日、プサン市（韓国）
⑩ 矢ケ崎典隆：アメリカ合衆国におけるロシア系ドイツ人の移住とエスニック文化の再生、第 57 回歴史地理学会大会、2014 年 5 月 17 日、長崎外国語大学（長崎県長崎市）
⑪ 矢ケ崎典隆：探検と発見のアメリカ地誌―地誌学の再構築に向けて―、会長講演、公益社団法人日本地理学会春季学術大会、2014 年 3 月 27 日、国士舘大学（東京都世田谷区）
⑫ 矢ケ崎典隆：Japanese overseas migration and the diffusion of baseball、The International Geographical Union 2013 Regional Conference Kyoto、2013 年 8 月 6 日、京都国際会議場（京都府京都市）
⑬ 山根拓：アメリカ合衆国における北欧系移民博物館の展示・活動の特色、地理科学学会春季学術大会、2013 年 6 月 6 日、広島大学（広島県東広島市）
⑭ 矢ケ崎典隆：アメリカのエスニック博物館―移民文化の共有と観光資源化―、第 56 回歴史地理学会大会、2013 年 5 月 19 日、砺波市文化会館（富山県砺波市）
⑮ 根田克彦：ボストン市におけるメインストリートプログラム、東北地理学会秋季学術大会、2012 年 10 月 13 日、秋田大学（秋田県秋田市）
⑯ 矢ケ崎典隆：前適応を用いたドイツ人のアナハイム植民事業の再検討、公益社団法人日本地理学会秋季学術大会、2012 年 10 月 7 日、神戸大学（兵庫県神戸市）
⑰ 矢ケ崎典隆：Asian migration in the global geographic context、The 7th China-Japan-Korea Joint Conference on Geography、招待講演、2012 年 8 月 4 日、長春市（中国）

６．研究組織

(1)研究代表者

矢ケ崎　典隆（YAGASAKI, Noritaka）
日本大学・文理学部・教授
研究者番号：３０１６６４７５

(2)研究分担者

山下　清海（YAMASHITA, Kiyomi）
筑波大学・生命環境系・教授
研究者番号：００１６６６６２

加賀美　雅弘（KAGAMI, Masahiro）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：６０１８５７０９

根田　克彦（NEDA, Katsuhiko）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：５０１９２２５８

山根　拓（YAMANE, Hiroshi）
富山大学・人間発達学部・教授
研究者番号：３０２２２３７６

石井　久生（ISHII, Hisao）
共立女子大学・国際学部・教授
研究者番号：７０２７２１２７

浦部　浩之（URABE, Hiroyuki）
獨協大学・国際教養学部・教授
研究者番号：３０３０６４７７

大石　太郎（OISHI, Taro）
関西学院大学・国際学部・准教授
研究者番号：７０４３３０９２